

その13

大正から続く老舗の四代目 銭湯文化の継承を見据え お客様が求めるサービス次々



もと ゆ おんせん
元湯温泉

法人名	合名会社 元湯温泉
業種	公衆浴場業
代表者名	こ だ に やすゆき 小谷 靖之
創業年	大正14年
所在地	鳥取県鳥取市末広温泉町557
従業員数	7人（家族3人、パート4人）
電話	0857・22・7617
URL	http://www8.plala.or.jp/ motoyu1126/



昭和初期の元湯温泉（左）。浴場の横に
湯治用の宿舎もあった（小谷さん提供）

◆大正十四年の創業から四代続く老舗銭湯

J R 鳥取駅からわずか五分の場所に、繁華街に湧き出す温泉「鳥取温泉」があります。そこに大正十四年から地元の人たちに愛されている銭湯があります。「元湯温泉」です。天然の温泉を使った銭湯で、常連客の中には三代、四代にわたって家族で利用しているお客様もいるほど、地域とともに歩んできた店です。現在の経営者は四代目の小谷靖之さん。三十代の若き経営者は、家族と力を合わせて伝統ある銭湯を守っています。

「元湯温泉」の発祥は今から八十五年前にさかのぼります。鳥取温泉が発見されてから二十年近くたった大正十年、鳥取温泉の中心に位置する吉方温泉町から三百メートル離れた田んぼの一部に温泉が湧き出ているのが見つかりました。そこにはいつしか簡単な浴槽を筵で囲った露天風呂ができました。やがて本格的な掘削が行われ、大正十四年に「噴泉浴場」として開湯しました。

そこは地域（現在の末広温泉町）に出た最初の温泉だったところから、利用客の間では「元湯」と呼

ばれるようになりました。小谷さんの曾祖父で初代の二郎さんが昭和七年、この温泉の権利を買い取り、屋号を「元湯温泉」と改めました。その後、二代目の英二さん、三代目の浩之さんと受け継がれ、昭和三十三年、区画整理が行われたのを機に建物を改築。当時では珍しい鉄筋コンクリートの建物で、町の話題になったと言います。

昭和四十年代までは、銭湯は生活になくてもならない場所でした。当時の「元湯温泉」の浴場は、洗い場が五か所、浴槽は六〜七人で満員になるという広さでしたが、そこに一日四百〜五百人のお客様が詰めかけていたそうです。

◆教員を辞めて四代目を後継

四代目の小谷靖之さんが後を継いだのは平成十六年。三代目が体調を崩し入院したのを契機に帰省を決めました。教員として県西部の中学校に勤務していた靖之さんでしたが、「いつかは継ごうと思っていたため、迷いはなかった」と言います。

しかし、いくら銭湯で育ってきたとはいえ、経営となれば話は別です。最初は右も左も分からず、病床の父、浩之さん



昭和33年に建てられた店舗

に指導を仰ぎつつ、母の早苗さんに手伝ってもらいながら何とか仕事を覚ええました。

また、今後の経営を考える上で大きな悩みが二つありました。一つは建物の老朽化です。昭和三十三年の建設後、何度も改修を重ねてきたとはいえ、床や壁は傷み、あちこちに不具合が出ていました。設備も旧式のままでシャワーもなく、お客様に不便をかけているのが気がかりでした。

もう一つは「これからの銭湯のあり方」です。すでに自宅に風呂があるのが当たり前となっており、昭和初期に三十〜四十軒あった鳥取市内の銭湯は四軒に減っていました。「元湯温泉」の客数も、一日四百〜五百人が利用していた全盛期に比べ、百五十人ほどに減っていました。

「自宅にも風呂があるのに、わざわざ入りに来てくれるお客様は、銭湯に何を求めているのだろうか?」。靖之さんは真剣に「お客様に満足いただけるサービス」を模索するようになりました。「銭湯の数は減っていますが、日本人の風呂好き、温泉好きは変わっていないと思います。だから『元湯温泉』らしさをもっと前面に出して、お客様に満足していただける店づくりができないかと考えました」。

そして昔ながらの銭湯の趣を残しつつ、今まで銭湯を利用していなかった人たちにも気軽に足を運んでもらえる店にリニューアルすることを決意したのです。

◆「新」と「旧」を織り交ぜた新店舗が完成

改装にあたり、山陽や関西方面の人気の温泉施設を見て回った靖之さん。そのアイデアが詰まった新しい店舗は、平成十八年に完成しました。ベージュ色の外壁に、柔らかなカーブを描く屋根が印象的です。

リニューアルのコンセプトは「ホッとする安らぎと、くつろぎの空間」を提供して、お客様に一層満足してもらうことでした。浴場は大浴槽一つと水風呂一つというシンプルな構造ですが、壁には香りの高いヒノキを使用。天井を九メートルと高くして、大きな木の梁を渡しました。湯船につかって天井を眺めると、日常とは違う開放的な気分になります。

もちろんシャワーもあり、ボティーツープも完備。脱衣場には、旧式の鍵のロッカーや木製のベンチが設置され、昔ながらの銭湯の趣を残しつつ、清潔感と安心感のある店舗に仕上げました。

昔ながらの銭湯の雰囲気を残すことに加え、お客様とのコミュニケーションを大切にしたいため一番こだわったのが番台です。最近フロント形式をとる店が多いなか、あえて番台スタイルを残しました。番台には母の早苗さんをはじめ



平成18年にリニューアルされた店舗



高い天井と大きな梁が
印象的な浴場の内部

め、年配の女性スタッフが座ります。そこで交わされるお客様との何気ない会話や、リクエストなどに耳を傾けるようにしています。

初めて訪れるお客様に安心していただくように、以前は裏にあった駐車場を表通りに移したことも、新規客増加の大きなポイントです。通り沿いには目につく位置に看板を設置し、「12月22日 冬至 ゆず湯」などイベントの日程などを随時、告知するようにしています。

◆女性や子どもが利用しやすいサービスを工夫

リニューアル前の客層は年配のお客様が大半でした。以前から若い女性や子どもにも気軽に来てもらいたいとの思いがありました。そこで、若い女性や子どもが入りやすい工夫や新しいサービスも始めました。

番台の良いところはお客様との距離が近いことですが、女性からすると「脱衣所が丸見えで恥ずかしい」という思いもあります。そこでリニューアルに際して、女湯の脱衣所に

は仕切りを設け、番台から脱衣所が直接見えない造りにしました。脱衣所の壁に飾られた絵画や詩などのディスプレイが、女性の心を和ませる雰囲気づくりに一役買っています。この絵画や詩は早苗さんが趣味で描いたもので、お客様へのもてなしの心が伝わってきます。

また、銭湯文化を継承するためには、子どもたちに利用してもらうことも大きな課題でした。以前から「子どもの日は小学生以下無料」のイベントを行っていましたが、新たに二つの大きな取り組みを実施しました。

一つは湯の温度を一度下げたことです。以前は四十三度に設定していましたが、リニューアルを機に子どもでも入りやすい四十二度に変更しました。この温度変更は子どもだけのためではなく、大人にとっても「のぼせ」の防止になり、体へ負担をかけず安全に銭湯を楽しんでもらえるようになりました。

二つ目はポイントカードの導入です。定期的



番台から女湯の脱衣所が見えないように工夫されている



リニューアルされた「番台」

は一日百五十人だった来客数が、現在は二百〇二百五十人と大幅にアップしています。特に、子ども連れの若いお母さんの増加が目立ち、週末を中心に家族連れのにぎやかな声が浴場に響くようになりました。

◆「自宅では入れない風呂」を楽しむイベント

「元湯温泉」は天然の温泉を利用していますが、来客数は季節により変化します。冬は温泉でゆっくり温まりたいと来客が多く、夏には家風呂で簡単にすませることで減少する傾向にありました。この対応策として十年ほど前からさまざまな「季節の風呂」や「変わ



子ども用のポイントカード

に銭湯に足を運んでほしいと、夏休みと冬休みには子ども向けのスタンプカードを発行するようにしました。スタンプカードは靖之さんの奥様、真理さんの手づくり。来店のためにスタンプが押され、ポイントが一定に達すると五百円の図書券などのプレゼントがもらえる仕組みです。平成二十一年の夏休みには、延べ千二百人の子どもが来店、プレゼント交換は九十件ほどあったということです。

こうした顧客満足を考えたサービスが功を奏し、改装前



冬至に行われる「柚子湯」

り湯」のイベントを多数開催して、お客様に足を運んでもらうように知恵を絞っています。

「季節の風呂」では、創業以来続けているのが端午の節句の「菖蒲湯しょうぶ」、冬至の「柚子湯ゆず」などです。これらは常連客にとつてはまさに季節の風物詩。毎年、いつもの二倍の来客があり、にぎやかな一日になります。

「変わり湯」では「よもぎ湯」や「びわの葉湯」があります。人々の暮らしに根付いてきた薬草を使った健康湯です。こう

した薬草の効果を風呂で楽しんでもらうアイデアは大変好評です。また、西洋のハーブを使った「ラベンダー湯」や、一風変わった「コーヒー風呂」も人気です。「変わり湯」は季節ごとに定期的に開催されており、通常の二、三割増しの来客があるということです。

このように「自宅では入れない風呂」を楽しむ行事は、お客様の満足感がぐっと得ているようです。



通りに面した看板には、「12月22日 冬至 ゆず湯」とイベントの告知も



靖之さんの奮闘ぶりを紹介する朝日新聞の記事（平成20年2月20日付）

◆日本の銭湯文化を次世代に残していきたい

お客様に足を運んでもらう機会を増やすさまざまな取り組みが話題になり、地域のメディアでも「元湯温泉」が紹介されています。平成二十年二月には、朝日新聞で靖之さんの奮闘ぶりが掲載されました。

今後の展望を靖之さんにたずねると「日本古来の銭湯文化と、大地の恵みである温泉を、子や孫の代まで伝えていくことです」という答えが返ってきました。靖之さんは温泉を「小谷家のもの」ではなく「地域のもの」として考えているのです。だから地域の人たちに気軽に利用してもらい、皆さんに安らぎや癒しを与えたいと切に願っています。

経費面を考えると、天然の温泉を利用しているため、最近の重油高騰の影響がほとんどないのは大きなメリットです。ですから営業時間も自由に設定でき、現在は通常の十三時～二十三時の営業のほかに、お客様からの要望もあって六時～九時三十分まで「朝風呂」の時間も設けています。お客様の立場に立った一つひ

とつのサービスが顧客満足を生み、それが次の世代の常連客をつくっていくのです。

新しい時代の銭湯のあり方を模索し、新しい取り組みにチャレンジする「元湯温泉」。これから地域の皆さんに愛される銭湯として歴史を重ねていくことでしょう。

◆取材メモ

取材に訪れたのは平日の十五時ごろでしたが、すでに男湯は八人ほどのお客様が入浴していました。皆さん常連の方々のようで、楽しそうに会話を交わされており「本当にアットホームな銭湯」という印象を強く持ちました。

経営者の靖之さんも、そんな常連客の皆さんを家族同様に大切に思っていました。 「風呂に入る」という目的だけではなく、人と人との触れ合いや、地域のつながりなど、希薄になりつつある人間関係を強めてくれる場所が、「銭湯」という場所なのです。これから「人々が集う場所」としていつまでも続いてほしいと心から思いました。